

第31期第5回 京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！



平成26年10月3日(金)午後2時～4時、京都市学校歴史博物館にて、
第31期京都市社会教育委員の第5回会議が開かれました。
今回も、わたくしマナビィが、会議の模様をレポートします。

出席委員(12名)

井上 章一委員, 井上 満郎委員, 大八木 淳史委員, 齊藤 修委員, 佐伯 久子委員, 茂山 千三郎委員,
鈴鹿 可奈子委員, 通崎 睦美委員, 富樫 一貴委員, 西脇 悦子委員, 諸岡 聖委員, 吉川 左紀子委員
(以上, 五十音順)

7月に委員の一部改選が行われ、
新たに富樫一貴委員と坂本香代子委員
が就任されました。



■ 開会に先立ち、新たに就任された委員の自己紹介

- 富樫 一貴 委員(平成25年度京都市PTA連絡協議会会長)
社会教育委員として皆さんと一緒に、子どもたちのため、社会のために
何ができるかを考え、活動できたらと考えております。よろしくお願いします。

当日御欠席の坂本香代子委員(京都市小学校長会役員・京都市立安井小学校長)
には、次回以降の御出席の時に自己紹介をしていただきます。



■ 開 会 [井上議長]

■ 議 事 「はばたけ未来へ!京プラン(京都市基本計画)」推進について

〈学びが社会に還元されるしくみづくり ～ボランティア等の市民活動の促進・支援の観点より～〉

(事務局から)

- ・ 今回取り挙げる本市生涯学習施策の柱の一つである「学びが社会に還元されるしくみづくり」は、
個人が学んだことを社会に還元することによって、生涯学習の理念が社会に浸透するとともに、自己の
学びを一層深めていただくことを期待するものです。そのため、各種ボランティアや市民の学習活動を
支える人材の育成・活用などを進めることとしています。
- ・ 本日の会場である学校歴史博物館でも、ボランティアの方々にも館運営に携わっていただいています。
本日は、ボランティアの方の御案内のもと、館内の見学をしていただき、その後、この議題について
御審議いただきます。

本日、案内をしていただくボランティアの方を御紹介!



- 太田 美千世 さん(京都市学校歴史博物館市民学芸員)

学校歴史博物館でボランティアをはじめて4年目になります。

もともと歴史が好きで、学生時代にも歴史を専攻していましたが、たまたま京都市
の博物館ボランティアの募集を知り、研修を受け、現在は京都市博物館ふれあい
ボランティア「虹の会」に所属しております。そこでこの館のボランティアの案内があり、
一番好きな歴史のことが学べると思い、応募しました。

私にとって、京都の番組小学校はすごく魅力的で、番組小学校を知ることによって、
京都のまちの奥深さを思い知らされます。この博物館に来て、喜んでくださる方も
多くいらっしゃるの、来るたびに励みになっております。



<学校歴史博物館 館内見学>

ボランティアの太田さんの案内で常設展を見学。

その後、森学芸員の解説で、企画展「絵描き村と学校—衣笠に伝わる名画—」の見学が行われました。

京都市学校歴史博物館

京都では、明治2年(1869年)に、番組小学校とよばれる日本で最初の学区制の小学校が64校つくられました。

京都市学校歴史博物館は、「番組小学校」をはじめとする京都の教育の伝統と、学校の運営と創設に力を注いだ町衆の情熱を全国に発信するため、京都市の学校に遺された歴史資料(教科書・文献資料・教材・教具等)約11,000点、また卒業生などが学校に寄贈した美術工芸品(絵画・書跡・陶磁器・染織等)約2,000点(うち1,500点は各学校で收藏)を収集・保存し、展示を行っています。

建物は、統廃合で閉校になった番組小学校のひとつである元開智小学校の校舎を利用しています。

幅広い年齢層の委員の皆さん…。

学校給食の展示コーナーでは、それぞれの小学生時代のメニューを懐かしそうに見比べていらっしゃいました!



<館内見学後、議事再開>

(事務局から)

- 京都市では、様々な観点からボランティア・市民活動の支援を行っております。教育委員会においても様々な領域でボランティア等の活動の場の提供や支援が行われており、延べ3万人の方に御参加いただいております。
- その一例として、[「京都市博物館ふれあいボランティア」](#)の活動状況等と、学校歴史博物館での取組について御説明します。

「京都市博物館ふれあいボランティア」について

- 平成11年度から養成講座を開設し、平成12年4月に第1期修了生による「虹の会」が発足。京都市内博物館施設連絡協議会(「京博連」)加盟館への派遣を開始し、現在、学校歴史博物館をはじめ28館で194名が活動中です。
- 教育委員会では、活動者数等の状況に応じて、養成講座を開催しています。
- 「虹の会」では、会員を対象とした研修会等を定期的実施しています。
- 課題としては、「活動の場(受入れ館数)の拡大」と「活動者の減少」が挙げられます。

学校歴史博物館の取組

- 平成10年の開館当初からボランティア(「市民学芸員」)の活用を始め、来館者への対応、展示物の簡単な解説等をお願いしています。
- 今年度は「京都市博物館ふれあいボランティア」から25名が登録され、お一人につき月に1~2回活動されています。加えて、本市文化市民局所管の「文化ボランティア」の方々にも、期間を区切って活動いただいております。10~12月は23名の方にお世話になる予定です。
- ボランティア活動のフォローとしては、年度当初に、学芸員の活動内容等の研修会、また、展示物の解説や市民学芸員自身の生涯学習に資するため、企画展に合わせた説明会等を開催しています。
- 当館独自の取組として「活動日誌」というものがあり、気づかれたことや感想等をボランティアの方々を書いていただき、ボランティア間での情報交換や、当館への意見集約に活用しています。
- ボランティア活動の動機としては、「余暇を人のために役立てたい」「興味のある事象にかかわりたい」「生きがいを見つけたい」「京都の魅力を知りたい、伝えたい」等です。また、活動してよかったこととして、「人や物、場面との出会いが自分の価値観を高めてくれる」「仕事以外での知り合いが増え、知識も増えた」「来館者に喜んでもらった時に手ごたえや充実感を覚える」などの感想をいただいております。

市全体の現状・課題・今後の方向

- 市全体では、1年間のうちに何らかのボランティア活動に携わった方は5人に1人で、「自己啓発・成長を図りたい」(43.1%)、「困っている人を支援したい」(41.1%)等が参加理由として挙げられています。
- 活動を通して得たものとしては、「多くの仲間ができた」(64.0%)、「活動自体が楽しい」(53.5%)、「地域社会とのつながりがつくれた」(48.0%)等となっています。
- また、6割弱の方が活動に関心を持っており、中でも女性は約3人に2人に上っています。東日本大震災の発生が一つの契機になっているようです。
- このように関心がありながら、活動に結びついていない理由としては、「参加するきっかけがない・参加方法がわからない」(35.1%)、「仕事が忙しい」(33.7%)等があります。
- 教育委員会としては、引き続き、これまでの活動促進・支援の方策を一層充実させるとともに、活動及び活動支援に対する評価を適切に行い、これらを反映させたさらなる改善にも取り組むことが肝要であると考えております。

○ 通崎 睦美 委員 (マリンバ・木琴奏者)

博物館に行きますと、静かに見たいのに、ボランティアの方がすごく積極的に解説してこられて、困ってしまうことが結構あります。ただ、学校歴史博物館のような小規模な施設で、偶然、来館者とボランティアの方との楽しい交流が芽生えるのであれば和やかで良いと思います。



(事務局から)

学校歴史博物館では、あまりに差し出がましいと鑑賞の邪魔になりますので、事前の研修会で「前に出過ぎないように」とお願いしています。当館での来館者とボランティアさんとのコミュニケーションといたしますと、来館者の方から「いやぁ懐かしいですわぁ」と話しかけてこられるパターンが多く、そのようなやりとりの中で、互いの学校生活の経験等を話し合うことで、手ごたえを感じておられるボランティアさんが多いように思います。

○ 井上 満郎 議長 (京都市歴史資料館長、京都産業大学名誉教授)



ボランティア活動に参加される方は、もっと社会に認められたいという思いを持たれていることが多いですから、それが行き過ぎますと、しゃべり過ぎという話になってくるわけです。これはボランティアの方の人柄にもよりますし、非常に微妙で難しい問題だと思います。ただ、館の方で、指導や助言もされておられるようですから、今後はうまく進んでいくのではないのでしょうか。

社会活動という意味では、本日お集まりの委員の皆さんは、それぞれの場所で活動に携わっておられるわけです。我々はボランティアではありませんが、市民の方にとっては、相手がボランティアであろうとなかろうと同じですので、皆さんの活動を通じてお感じになることがありましたら、是非お聞かせください。

○ 茂山 千三郎 委員 (狂言師)

3か月に1回、京都市主催の「[市民狂言会](#)」があり、会場整理やお客様の誘導等でボランティアさんに助けていただいています。ただ、僕は舞台上におり、ロビーに出ることはありませんので、ボランティアさんにほとんどお目にかかることがなく、お世話になっているにもかかわらず、お礼も言えていないという気持ちは持っています。



もし、「今日のボランティアの方たちです」と紹介等があれば、役者も感謝の気持ちを伝える機会が持てるので、どこかでそうしたタイミングがあってもいいのではないかと思います。

○ 齊藤 修 委員（株式会社京都新聞ホールディングス顧問）

新聞というものは、もともと上から目線で押し付けがましく言う商売ですが（笑）、いろいろと出会いがあります。中にはうるさいと思うものもありますが、それもひとつの出会いであると思っていただくと良いと思います。

また、本日、館内を見学させていただいて、「ほんまもの」が身近なところがあり、自分が少し能動的になれば素晴らしいことが学べるのだと感じました。ただ、博物館ふれあいボランティアの課題として、「活動の場の拡大」・「活動者の減少」と資料にあります。受け入れるところ、つまり、ボランティアが活躍できる場が広がれば、活動人数も増えると思うのですが、受入れが全体の約 1 割にとどまっているというのはどういうことなのでしょうか。



（事務局から）

要因としては、まず、雇用関係があった方が指示や指導等をしやすいという理由から、ボランティアよりも職員等で対応する館が多いことが挙げられます。また、館の規模が小さく、ボランティアを担当する職員がいないという理由から、受入れができないという館もあります。

○ 井上 満郎 議長

ボランティアは無償奉仕でしょうか。それとも交通費等の支給があるのでしょうか。また、活動者の減少について、その要因をどのようにお考えですか。

（事務局から）

報酬については、活動の時間帯によって差はありますが、交通費込みで活動 1 回あたり 1,000 円を支給している場合が多いです。中には無償という館もありますが、展示品目録の進呈等、何らかの物品を支給していただいている所もあります。

活動者の減少については、最も多いのが高齢化に伴う減少、または、身内に介護の必要性が生じた等、家庭環境の変化です。一方で、長年の活動の中で、多くの館でいろいろな活動を経験されて引退される方もおられます。毎年 10～20 名程度が減少している状況ですので、今年度は養成講座を 3 年ぶりに実施し、新たに約 80 名程度のボランティアを養成する予定です。



○ 佐伯 久子 委員（京都ユネスコ協会会員）

先ほどの報告の中に、ボランティア活動を始める際の課題として、「参加するきっかけがない・参加方法が分からない」とありましたが、このような方々に対してのケアといいますか、「こうしたら参加できます」ということを何かでアピールできる方法を考えるべきだと思います。この点について、現在、事務局で取り組まれていること、また、その結果についてお教えいただきたいと思います。

○ 鈴鹿 可奈子 委員（株式会社聖護院ハツ橋総本店専務取締役）

私の場合、美術館に行って話を聞くと、ボランティアの方と関わっている、もしくは関わっていると認識している場所がありませんが、その中で感じるのは、ボランティアの方はよく勉強されていて、興味のある方が活動されているということです。そういった意味では、御本人もやりがいを感じられますし、そのような方々の説明を求めて来館される方もいますから、ボランティアの存在は大事だと思います。



ただ、私がこれまでボランティア活動に関わることができなかった背景には、先ほどから話題に挙がっている「参加するきっかけがない・参加方法がわからない」ということがあると思います。もし、気軽に参加できる活動情報が分かりやすいところがあれば、「ちょっと時間があるから参加しよう」となるかもしれないのですが、おそらく現状では、活動する側が情報を探さなければ、必要な情報が見当たらないのではないのでしょうか。まず、参加する意識を持つためにも、人目につくところに「こういうボランティアを募集していますよ」という情報があれば、活動に興味がなかった人の中にも、新たに興味を持つ人が出てくると思います。

（事務局から）

ボランティア活動に関する情報は、ちらしやポスターの作成・配架、市民しんぶんへの情報掲載により発信しています。最近では、Webサイトを設けて、毎日のように情報を発信することもあります。

しかし、それらの情報が必要としている人に届いているのかということについては、まだまだ不足している部分があり、より良い方法を模索しているのが現状です。

例えば、市民しんぶんは、紙面スペースがあまり取れず、多くの情報を載せられないので、もともと興味がある人しか目がいけないようです。そこで、募集する内容に応じて、その活動に興味を持ってもらえそうな場所 — 例えば、若い人をターゲットにするなら大学 — をお願いするなどの工夫をしています。また、地域で活躍されているボランティアさんに、地域の中でお声かけをしていただく等、地域の方々のコミュニケーションを通じて活動していただける方を探すこともあります。

このように、様々な方法で情報を発信していますが、発信した情報が、それらを手にとった方々の興味を惹くものであるかということについては、検証が必要だと考えています。また、電話相談ボランティアのように、事前にかかなりの勉強が必要なものもありますが、そのような活動であっても興味を持ってもらえるよう、具体的な活動状況についての情報を発信していくことも大事だと感じています。

ボランティア募集や講座の案内は、[京都市福祉ボランティアセンターホームページ](#)や、[京都市生涯学習情報検索システム「京（みやこ）まなびネット」](#)などでも発信中です！



○ 諸岡 聖 委員（市民公募委員・財団法人職員）



やはり、入口の環境整備が大事になってくると思います。入口のハードルを低くして、「ボランティアって楽しいものなんだ」ということを、具体的に分かりやすく伝えるようにしてもらいたいと思います。また、活動支援という点では、例えば、助成金の申請等があると、書類作成にかかなりの手間がかかると聞きます。事務処理等についてもハードルを低くしていただきたいです。

さらに、活動が終わった後の評価が大切です。行政・市民とも自己評価も大事ですが、お互いを評価し合う相互評価が大事になってくると思います。

その際、うまくいかないことも出てくると思いますが、それを見つけることができただけでも成果であり、それを翌年度以降の制度設計に落とし込んでいけば良いと思います。

行政には、ボランティアが負担を感じることがない程度の制度づくりにさらに努力してもらいたいです。

○ 井上 満郎 議長

ボランティアをされる方は、当然、各人をとりまく家庭環境も様々に異なります。そして、個人あるいは家族・社会をとりまく状況はどんどん動いていますから、行政としては、緻密で細やかな目配り、気配りが必要なのではないのでしょうか。

○ 吉川 左紀子 委員（京都大学こころの未来研究センター教授・センター長）



ボランティア活動が盛んなまちは、外から来た人たちの、そのまちに対する印象も良いのではと思っています。ヨーロッパの小さなまちの博物館や美術館に行ったときに、先生に引率された小学生が見学に来ていて、その子たちにボランティアの方が説明している様子を見たことがあります。その説明を私たち観光客も横で聞いたりして、なかなか楽しい経験でした。

博物館に行ったときに、そこで偶然出会ったボランティアさんから話を聞くのも良いですが、「いつ・何人くらいで行きたい」という来館者の予定が館に伝わり、それに合わせてボランティアが活動をする仕掛けがもう少しあると良いのではないのでしょうか。

また、広報についてですが、企画展等のポスターをじっくり見る方は関心がある方が多いと思いますから、ポスターにボランティアの募集情報をあわせて載せる等して、もともと関心を持っている方に情報が届く仕掛けができるといいと感じました。

○ 井上 章一 委員（国際日本文化研究センター教授・副所長）



突拍子もない話ですが、生涯教育ということ考えたときに、例えば、近所の中学生がテナーサックスの練習を始めたときに、最初は音がかなりひどく響きますが、近所は耐えてくれることが多いと思います。「あの子、中学校に入ってブラスバンドをやりましたんだな」と。ですが、定年退職後の60歳を過ぎた方が同じことを始めたときに、近所には忍耐力がないと思います（笑）。

世間は生涯学習が尊いことだと言いますが、本音ではそう思っていないのではないのでしょうか。このことから、私たちは「愛されるボランティア」になることは、とてつもなく難しいことだとわきまえておかなければならないと思うのです。

○ 井上 満郎 議長

確かに、ボランティアも相手も、一人一人がそれぞれの意思を持っておりますので、「愛されるボランティア」になることは、そう簡単なことではないです。しかし、愛される人間になりたいというところからボランティアを始めるのも、一つの活動を始める大きなきっかけでありますし、大切にしなければなりませんと思います。

○ 西脇 悦子 副議長（京都市地域女性連合会相談役）

私たち女性会では、学校からの要請で学校へ行くことがよくありますが、特にボランティアだという意識はしていません。多くの活動を行って来て思うことは、ボランティアは肩に力を入れてするものではないということです。

また、以前、女性会で環境問題にかかる研修を実施し、ボランティアの方に講師をお願いしたところ、その方の知識が残念ながら受講者の期待以下だったことがありました。このことから、ボランティアを求める側も、ボランティアにどの程度まで求めるのかをはっきりさせ、そのうえで選任することが大事だと感じました。発信する方と受ける方との思いがきっちり合ったときに、本当に喜ばれるボランティアになると思います。



○ 大八木 淳史 委員（元ラグビー日本代表・学校法人芦屋学園理事長）

二つほどの観点からお話しさせていただきたいと思います。

まず、京都にはボランティアを活用する素材が非常にたくさんあり、何を仕掛けるのも容易にできそうだといつも思っています。その中で、「ボランティア」の定義化、または、京都が持つ様々な素材を活用して

「ボランティア」と似た意味の京都ならではの造語を作るといった革新的なことを行っていくのが京都らしいのではないかと思います。

もう一つは、広報活動ですが、やはり、メディアを使う、中でも SNS（ソーシャルネットワークサービス）の活用が重要です。SNS というと、教育現場ではネガティブな部分もたくさん出ているのですが、その効果は絶大で、そういう画期的なことも導入することが必要だと思えます。一度やってみて、だめであればすぐに撤退することもアリだと思えます。

最後に、私どもの中学・高等学校では、「ボランティア部」という部活動があります。他校においても、同様の部活動を行っている学校はあると思えますので、そのあたりの世代に対して、学校教育現場と連携して働きかけると、活動に広がりが出ると思えます。



○ 富樫 一貴 委員

PTA の観点からお話ししたいと思います。

京都市では、たいてい小学校から PTA 活動に御参加いただいています。活動内容は、単純に言いますと、「子どもと一緒に体育館をお掃除しましょう、窓拭きをしましょう」と呼びかけ、お手伝いに来ていただくというものです。来てもらった人たちには「これがボランティアであり、社会貢献につながっているのですよ。みんながそれぞれの活動において社会貢献をしていると自覚し、活動すれば京都は良くなるし、日本も良くなるのです。」という話を柔らかくしています。このように、いろいろな活動の窓口をつくり、参加しやすい扉をつくるのが、私たち PTA の役割です。

中学校を卒業すると、ひとまず PTA 活動は終わります。これまで取り組んできた PTA 活動はボランティア活動につながっていましたが、以降は「皆さん自身の得意な場で社会貢献してください」となります。そこでタイミングよく活動の情報が入ってくると、自分の得意なところで活動することができます。やはり、ボランティアを募集するタイミングも重要だと思えます。

PTA 活動が社会貢献の入口であり、また、それを終えた人たちが、友達等を誘いながら、京都市民として社会に貢献していくことがボランティアにつながり、それこそが「真のワーク・ライフ・バランス」であるということ伝えていかねばなりません。ボランティアは、好きなことだけをするのではなく、それが何らかの社会貢献につながっていることをしっかりと伝えることが、ボランティアを盛んにしていく根本にあると思えます。



「真のワーク・ライフ・バランス」とは？

「仕事」「家庭」「地域・社会」での「つながり」を大切に、そこで求められる役割や責任を果たすことで、「生きがい」のある心豊かな人生を送ること。



○ 井上 満郎 議長

本日の議事「学びが社会に還元されるしくみづくり」は、一回の議論で終わるものではないかと思えます。引き続き、様々な形で、皆様の御意見をお伺いしたいと思っています。

■ 報告一 「平成 26 年度指定都市社会教育委員連絡協議会 浜松大会」報告 及び「第 56 回全国社会教育研究大会 徳島大会」出席者について

(事務局から)

- 去る 6 月 27 日に浜松市で開催されました指定都市社会教育委員連絡協議会では、4 つの協議題について協議・意見交換等を行いました。広島市から提案された「生涯学習をリードしていく人材の育成を推進するネットワークの構築や取組について」等は、本日の議事とも関連し、他都市でも大きな関心事となっていることが伺えました。
- 10 月 23 日から開催される第 56 回全国社会教育研究大会徳島大会には、諸岡委員に御出席いただきます。

■ 報告一2 京都市生涯学習市民フォーラム「平成26年度総会・シンポジウム」について

(事務局から)

- 今年度の総会・シンポジウムを12月9日(火)午後3時から京都産業会館 シルクホール(下京区四條室町角)にて開催します。
- シンポジウムでは、「美!味! 京の食文化 ~伝える 広げる 心と知恵~」と題して、鈴鹿委員、京料理木乃婦三代目の高橋拓児氏をゲストにお招きし、堀場会長、門川市長とのディスカッションを行っていただきます。

参加申込みは、京都いつでもコール (TEL661-3755) までどうぞ。
(先着順・11月30日まで) 多くの方の御参加をお待ちしています!
※ 詳しくは [「京まなびネット」イベント情報ページ](#)へ



■ 主催事業及び刊行物の案内について

■ 閉会【井上議長】

■ 閉会挨拶

閉会に当たり、中村 公紀 生涯学習部長から挨拶がありました。

